

一線を越えると



2月の岩籠山。雪が背の低い木々を被う。われわれは目的地に向かって直線的に進む。

本格的な登山を始めて四十年ほどになる。この間一度だけ凍死しかかったことがある。そのときの体験が、生命の根幹に関わることと考えるので、そのことを書きたい。

最近では四月から五月にかけての三の峰や別山はのんびりとした春山気分に登れる山になっていくが、その当時は厳しい山であった。

山岳会の春山合宿で総勢七名くらいだったと思う、下で雨だったのが六本檜を越えるころから曇に変わり、破れたカッパから冷たい水が容赦なく入ってきて身体を冷やした。途中で雪にかわった。山用の下着でなかったので、身体は冷えるばかりであった。

三の峰の小屋までそう遠くないところまで登った地点で、私は、少しくたびれたので、しばらく休んでから行くから先に行ってくれと仲間告げた。みんなはそうかと言って進んでいった。寒さは全く感じなかった。休めばまた歩けると思っていた。

列の最後にリーダーがいた。リーダーは私の状況を見て、絶対休んではダメだ、どんなことをしてもこの先にある小屋までたどり着くのだと、私を引きずるようにして小屋まで連れて行ってくれた。

小屋について濡れた下着を交換して火に手をかざして初めて猛烈な寒さに襲われた。

あるだけ着込んで寝袋に入ったが震えは止まらなかった。歯はいくら食いしばってもがちがちと鳴り続けた。

あるとき一人で雪の中で休んでいたら確実に死んでいたと思う。

凍死の直前は寒さの感覚がなく、むしろ快適にさえ感じることをこの時初めて知った。あるとき経験豊かなリーダーがいてくれなかったらと思うとぞつとする。

つい最近の新聞に、これは山登りではないが、ああ同じだと思うことが書いてあったので、少し長いがそれを引用したい。

脳腫瘍と蜘蛛膜下出血の大手術をして、その後二人のお子さんを出産された女性の言葉である。

「個人的な感覚だが、闘病で体験した痛みと、出産の痛みは違っていた。死の淵をのぞいた痛みは、頂点に近づくと身体や脳が和らげてくれたように思う。しかし、産みの苦しみは最後まで楽にならなかった。

生きていくための痛みは和らげてはもらえない。ささやかな、そして大きな発見だった。痛みを感じることも、生きると言うことかも知れない」

この方の結論は、後半の強く生き続ける意志にあるが、しかし、死の淵まで行くと身体的な苦悩は和らげられるという指摘は私の体験と同じである。

死神は甘美な手招きをするといえいいのか。あるいは、もういいよと誰かが許してくれるのか。しかし、山では死んではいけないと思っっている。

追記。このごろの登山用の下着はハイテクを駆使した非常に優秀なものが多い。汗でぬれると、下着自ら水分を吸い上げ外に出すように作られている。雨具も水蒸気（汗）は外に出すが水滴（雨）は通さない構造になっている。身体がぬれて体温が下がるような事態はおよそ考えられなくなった。

（二〇〇六年四月一八日）